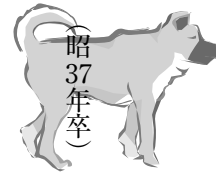


# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
〒606-8202  
京都市左京区田中大塚町49  
075-701-3210

## 百年の節目に思う

洛友会副会長 三木 弼一 (昭37年卒)



京都大学工学部電気工学科を1962(昭和37)年に卒業して、松下電器に就職した。以来、約半世紀を期せずして、家電製品とその技術開発に携わることになってしまった。一つの分野にのみ携わり、また一つの会社に長年勤めると、その企業文化にどっぷり浸かってしまい、自分を客観的に見つめる機会が少ない。企業生活の晩年は、技術担当以外に環境問題や、知的財産権、あるいは品質問題の担当も経験し、少しは技術一筋か

ら脱却したように見えても、もの見方に偏りがあるのではないかと、少なくともその背景や歴史を再考しなければならぬのではないかと自問自答している昨今である。

### 松下電器の百年

大阪の町に、初めて電車が、築港「花園橋間」を走ったのは、1903(明治36)年と記録されている。その後1909(明治42)年までに市内の主要路線が開通した。漸く洋風建築が立ち並んだ大通りを沢山の乗客を乗せて走る電車を見て、松下幸之助は「これからは電気の時代や」と決心し、自転車屋での丁稚奉公を止め、大阪電灯(恐らく関西電力の前身であろう)に職を求めたようである。およそ100年前の話である。その後、独立し、起業して作った松下電器は、国力の伸展に従うように驚異

的な発展を続ける。しかしながら、昭和が終り、創業者の永眠及びパブルの崩壊とともに、成長の歩みが鈍ってしまう。この1989(昭和64、平成1)年が、日本の製造業の分水嶺であったと多くの識者が語っている。所謂国際化問題である。今や松下電器は関係会社を入れると、従業員総数は、30万人を越え、そのうちの海外従業員数は、およそ3分の2の20万人以上となつてい

る。海外と国内比率は、製造部門がもっとも多く、次いで販売であるが、技術はまだ70%が日本人特に関西地区の従業員で占められている。その比率の是非はともかく、質の向上と新しい国際化が強く求められている。なぜなら、多くの日本のエクセレントカンパニーは、その収益の70%を海外から揚げながら、各地で納税することにより、地域社会にも国家にも、貢献をしているからである。

技術立社、科学技術立国が掛け声のみで無ければ、現在のようなGDPの2倍以上ともいう途方も無い国および地方自治体の借財は、企業収益の向上によって、楽々と返済できるに違いない。企業人の奮起が望まれる。

### IECの百年

昨年、その業務内容をよく精査せず、国際電気標準会議(IEC)の日本代表評議員を引き受けてしま

った。評議会(ISOでは理事会、IECでは評議会と訳す)は、参加国65カ国のうち、選挙で10カ国、無選挙で5カ国、計15カ国の代表で構成され、IEC全体の政策審議をおこなう。日本は無選挙国(いわゆる常任評議員国)であるから、筆者は日本政府の指名により、評議員となつたものである。IECは、ISO(国際標準化機構)やITU(国際電気通信連合)と並ぶ、技術標準化の機関であるが、そのルーツは最も古く、1906(明治39)年のロンドン国際電気会議で発足している。

今年で、丁度創設100周年を迎える、その記念総会は当初ロンドンで開催の予定であった。しかし、イギリス代表が辞退し、急遽ベルリンで開催されることになった。この第1回IECロンドン会議には、非公式ではあるが、藤岡市助さんという芝浦製作所(東芝の前身)の創設者が参加された。1910(明治43)年、電気学会を中心として、政府援助を仰がず、産業界、学界が寄付をして費用を捻出し、正式に加入している。1881(明治14)年、最初の国際電気博覧会で、エジソンの白熱電灯照明システムが展示されたのが、電気実用化の嚆矢である。石炭による第1次産業革命には著しく遅れたものの、明治に入って、大阪

## 迎春

二〇〇六年一月一日

### 本 部 役 員

名誉会長 近藤 文治  
会 長 尾 真  
副会長 馬場 征彦  
三木 弼一  
荒木 光彦

### 支 部 長

関西 森本 浩志  
東京 古濱 洋治  
中部 増田 宗敏  
中国 細田 順弘  
四国 武智 泰三  
九州 岡 範彦  
北陸 中島 恭一  
東北 伊藤 貴康  
北海道 芝山 龍一

### 本 部 幹 事

木村 磐根  
神戸 俊夫  
松重 和美  
島崎 眞昭  
松本 博

に電車を走らせた日本人は、幸いにして所謂世界の電気産業革命には、遅れを取っていない。マックスウェルのイギリスに替わり、ドイツや日本などが、IEC牽引役として期待されている。

**京都大学電気工学科100周年**

京都大学(1897、明治30年創立)も、電気工学科(1898、明治31年創立)も、数年前に創立100周年を迎えたことは、記憶に新しい。明治以来、洛友会の諸先輩が活躍されたことは言うに及ばないが、総じて言うならば、アメリカと並んで、日本の工業教育が、すばらしい成果をあげたことは間違いないであろう。一時はその優れた製造力を基にして、2%の人口の日本人が、世界のGDPの20%を占有してしまったのであるから。

しかしながら、今や100年目にしで、大きな転換期を迎えたようである。

去年暮、関西の国公立及び私立の工学部長を主要会員とする関西工学教育協会の懇話会が大阪大学で開かれた。その会長職に推され、研究発表を聞く機会があった。日本の工学教育に様々な問題があるが、小学校、中学校、高等学校の理科教育の現状の報告を聞いて、改めてその貧しさに唖然とし、これは大変なことであると思つた。

洛友会という、一度は席を同じ

くし、また共通の文化で育った人々が、工学教育、幼児教育、国際化問題など、若い若さを問わず、議論百出して、新しい日本社会のありかたを語ることが出来る同窓会であれば、すばらしいと、新年を迎えて思う次第である。

**教室だより**

**電気系教室懇話会報告**

平成17年度の電気系懇話会は11月11日(金)に約120名の参加のもとに開催されました。

電気工学専攻、電子工学専攻は平成15年夏に桂キャンパスに移転しましたが、懇話会は昨年まで従来どおり吉田キャンパスで開催してまいりました。今年は初めて桂キャンパスBクラスターの「桂ホール」(第一部講演会)、「カフェ・アルテ」(第二部懇親会)で行われました。また、これまでは電気系教室主催でしたが、今年から洛友会が共催という形で行われました。当日はあいにくの曇り空で、講演開始の頃から雨が降りはじめ、あいにくの天気となりましたが、多くの教職員・院生・学部生・卒業生にご参加いただきました。

第一部の講演会では電気工学専攻長の小林哲生教授が司会を務められました。ご講演に先立って、



電気電子工学科長の橘邦英教授からご挨拶がありました。

最初のご講演は、田邊輝義氏(昭和44年卒、株式会社ビスキャス代表取締役社長)による「固体絶縁超高压ケーブルの開発沿革と今日の事業課題」でした。ご講演の冒頭、ビスキャスという会社の社名の由来(ラテン語のPowerを表すVISとCable and System)と生い立ち(古河電工とフジクラの融合)についてご紹介いただきました。ご講演では50万ボルト地中送電のための超高压ケーブルがいかにして開発されたかを分かりやすくお話いただきました。感銘したのはケーブル絶縁体中のmmの不純物の存在を丹念に調べては除去することで、はじめて50万ボルト用のケーブルができるというお話でした。「mmを制してM(メガ)を実現する」という合言葉のもと開発されたということです。現場

でクリーンルームを作り100トンあるケーブルを接合していくというお話には驚嘆するばかりでした。商業レベルでこのケーブルが製造できるのは、現在は日本だけのことです。これからの事業課題としては、市場が海外に移るとともに、日本におけるプロジェクトが減り、そのため若い世代の経験が減ることで、トラブルが起こったときの対策が問題になってくるお話でした。

2番目のご講演は松田晃一氏(昭和43年卒、NITTアドバンステクノロジ株式会社代表取締役常務)による「情報システムの研究開発、今と昔」でした。コンピュータシステムの高信頼化の実現に関するこれまでの研究開発についてお話いただきました。入社当時、電電公社(当時)の国産最高速計算機システム(Denden Information Processing System, DIPS)の開発途



**迎 春**

二〇〇六年一月一日

京都大学  
**電気関係教室**  
教官一同

**フジテック株式会社**  
取締役会長 大谷 謙治

**シャープ株式会社**

**松下電器産業 株式会社**

**GS YUASA**

鉛蓄電池・その他電池  
電源装置・照明器・ろ過装置他  
(株)シーエス・ユアサ  
コーポレーション  
代表取締役社長 大坪 愛雄



上で、その研究開発に参加された  
 ようですが、故障率の高さが問題  
 になっていったそうです。全く故障  
 しない計算機の実現は現実的には  
 無理なことから、ホットスタンバ  
 イという、複数の計算機を利用す  
 る方法をご考案になり、利用者に  
 故障を感じさせないシステム(ノ  
 ーダウンシステム)を作ること  
 で、信頼性を1桁上げたことなどを  
 紹介いただきました。最近は大  
 型のメインフレームは時代遅れに  
 なり、クライアントサーバ型に移  
 行しており、ダウンサイジングが  
 進んでいること、単一ベンダ型  
 から複数ベンダ型になりつつある  
 ことなどを説明頂きました。また、  
 現在の課題についてもご説明くだ  
 さいました。その中で、これから



の研究開発で重要なのは「人材・  
 経験」であるとのメッセージを頂  
 いたのは、1番目の田邊氏がご講  
 演の最後にお話になられた「経験  
 の不足という問題」とも相通ずる  
 お話だったかと思えます。

休憩をはさんで3番目のご講演  
 は長尾真先生(昭和34年卒、独立

**松本 紘 教授 最終講義のご案内**

松本 紘 教授(電子工学科昭和40年卒)におかれましては、来る平成18年3  
 月31日付けで、教授職を停年退任されることになりました(理事・副学長  
 として、引き続き京都大学に在職されます)。  
 左記の通り先生の最終講義を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

**日時** 平成18年3月10日(金) 午後三時半時より  
**場所** 京都大学 桂キャンパスBクラスター 事務管理棟1階 桂ホール  
**題目** 宇宙電波工学  
**連絡先** 京都大学生存圏研究所  
 小嶋 浩嗣 TEL 0774-381-3816  
 電子メール kojima@rishi.kyoto-u.ac.jp

**松本 紘 教授 退任記念会のご案内**

松本 紘 教授退任記念会を左記通り行われます。お問い合わせは、最終  
 講義と同じ連絡先までお願い致します。

**記念講演** 平成18年3月21日(祝日) 午後二時半より  
 京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール  
**記念パーティ** 平成18年3月21日(祝日) 午後四時半より  
 京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール

行政法人情報通信研究機構理事  
 長、京都大学名誉教授、元京都大  
 学総長)による「研究生活40年」  
 でした。長尾先生は長年の情報メ  
 ディア分野でのご研究に対して日  
 本のノーベル賞とも言えるべき「日  
 本国際賞」を平成17年4月に受賞  
 されました。受賞業績は「自然言  
 語処理及び画像の知的処理に対す  
 る先駆的貢献」です。今回のご講  
 演はその受賞記念講演といった意  
 味合いもあり、これまでの研究生  
 活を振り返っていただきました。  
 40年の研究を振り返りながら、  
 「研究者たるもの如何に研究を進  
 めるべきか」について多くの示唆  
 をいただきました。研究論文の読  
 み方・書き方、研究テーマの選  
 び方として流行を追わないこと、研  
 究には波があり、ひとつの研究の  
 成熟期に次のテーマの種をまくこ  
 となど、長尾先生のこれまでの研  
 究を例に取り分りやすくお話し  
 いただきました。上司の説得の仕  
 方や研究費をいかに獲得するか、後  
 進の指導についてもその秘訣をお  
 話いただきました。新しいテーマ  
 に取り掛かるときに「すべての論  
 文を読む」という態度、現実には数  
 百の論文を3ヶ月で読破されたと  
 のお話を伺い自分の普段の態度を  
 反省しました。また、「10年やっ  
 ていて世界一流にならねば失格で  
 ある」の一言は身にしみました。

いずれのご講演も、講師の先生  
 方がこれまでに携わってこられた  
 研究開発を例に取り、どのように  
 問題に取り組んできたかを分かり  
 やすくご説明いただくと同時に、  
 これからの研究開発の問題点を提  
 起していただき、今後研究開発の  
 主力を担うと考えられる若手教員、  
 院生・学部生にとっては貴重なメ  
 ッセージになったと感じました。  
 第二部懇親会は、午後5時30分  
 より同じ桂キャンパスBクラスター  
 ・福利厚生棟内のカフェ・アル  
 テにおいて開催されました。司会  
 は電子工学専攻長の石川順三教授  
 が務められました。懇親会の冒頭、  
 工学研究科長・工学部長の荒木光  
 彦教授からご挨拶がありました。  
 ご参加いただいた名誉教授の先生  
 の中で最年長の小川徹名誉教授に  
 乾杯の音頭をとっていただき、そ  
 の後は講師の先生方、名誉教授の  
 先生方、教職員、院生・学部生が  
 懇親を深めました。カフェ・アル  
 テは、平成17年4月に桂キャンパ  
 スに開業した京大生協のカフェ  
 (喫茶)です。普段は広く思える  
 カフェも120名を超える参加者でい  
 っぱいになりました。途中、洛友  
 会幹事の木村磐根名誉教授のスピ  
 ーチがありました。懇親会の最後  
 は、この日夕方まで吉田キャンパ  
 スで3回生の学生実験をご指導い  
 ただいた後、桂キャンパスに駆け

継 S C C  
 代表取締役社長 松尾 泰

宇宙技術開発  
 代表取締役社長 松尾 泰

電子開発学園  
 北海道情報大学  
 理事長 松尾 泰

高周波熱錬  
 代表取締役社長 山下 英治

継 村田製作所

代表取締役社長 村田 泰隆

継 電気評論社

つけられた通信情報システム専攻長の吉田進教授のご挨拶で締めくくり、午後7時30分にお開きとなりました。

最後になりましたが、ご講演を快くお引き受けいただいた講師の先生方をはじめ、遠方よりご参加いただきました卒業生の皆様、ご参加くださった教職員、院生・学部生の皆様に厚く御礼申し上げます。本年度より共催となりました洛友会にはサポートをいただきました。また、本報告作成においては、電気工学専攻の濱田昌司先生、電子工学専攻の酒井道先生のご協力を得ましたことを申し添えます。

後藤康仁(昭60年卒) 記

会員寄稿

学術研究と

大学の国際的評価

岩噌 弘三(昭28年卒)

私は、このところ7年あまり、米国の学会関係の論文を主体に、原稿用紙1枚程度にまとめる抄訳の仕事を、多い年には1500件程度していますが、日本の皆様に知って頂きたい内容が多いので、僭越ながら紙面をお借りすることにしました。また、外紙に国際的に話題になっていますが、国内では取り上げられていない大学の国

際比較が掲載されてきましたので、ご承知の方もあるかもしれませんが、紹介させて頂きます。

1. 日本の論文発表の貧弱さ

(1)外国の学会関係

米国のIEEEは、英国の伝統あるIEEEなどは全く比較にならないほどに大規模な活動をしていて、海外各地でも会合が開催され、本年(2005年)5月16-20日には韓国のソウルでICC2005という通信関係の会合を開催し、3000ページ以上にも達する予稿を発表しています。その前年の2004年3月9-11日の間に香港で、Infocom 2004というコンピュータ関係の会議を開催しています。

米国で出版されるIEEE関連の出版物に発表される論文数は圧倒的に中国人系が多く、続いて韓国人が欧米系の人より目立ち、台湾人、シンガポール人などもかなり発表しています。極く稀に日本人を発見するとホットするのですが、和英辞書から単語を探してきて論文を作成するので、通常の英文を使用していない風変わりな単語を使用し文法上も理解できないような文章のこともあります。最近のIEEEのJournal on Selected Area in Communicationsの2005年9月号は、今話題の無線アドホック・ネットワークと

いう固定的なインフラストラクチャを持たず、各ノードが中継機能を持つ形態のネットワークを主体に掲載しています。このネットワークは、分り易い例では、戦争などで軍が進撃する時に先端の軍は大電力で基地局と交信する必要は無く、後属の部隊に弱い電力で通信すれば、次々に中継されて目的地に到達する方式です。大規模なセンサー網にも適していると言われ、将来の電気通信網は固定網とアドホック・ネットワークの組み合わせになると主張している論文もあります。ここに、珍しく横浜国大から論文が1件発表されていますが、指導教官は、米国の留学した助教教授でした。この雑誌の論文数は21件ですが、発表者を分類すると興味ある内容となります。7件の米国からの論文(中国系2人によるのが2件、他は、2人のMIT勤務の中国系、シンガポール人と中国人、インド人とギリシャ人、2人のイタリイ人、純粋の米国人が各1件)、3件のカナダからの論文(2件の純粋のカナダ人以外に、カナダ人とロシア人によるのが1件)、3件のイタリイ人からの論文以外に、1件のヨルダン人、1件のタイ人とミャンマ人の共同研究、1件の中国人・香港出身者・シンガポール人による共同研究、米英中国人のシンガ

ポールからの発表、スイスからの1件など、アジアの開発途上国まで含めて多彩であり、国境を越えての研究も進んでいるようです。無線部門ほどではありませんが、関心を集めているのにインターネットがあり、サービスの差別化やセキュリティなどが論議されていますが、私の読んだ範囲では日本人の発表がありません。無線やインターネットの最新の研究に日本人が加わらなくてよいのかと疑問を持っています。ただ一つ日本人として嬉しく思うことに、外国人の論文に、「伸上フエーピング」がしばしば引用されていることです。日本からの論文数は極めて少ない中でも阪大からのが目立ちます。通信工学科の存在にもよるのでしようが、優れた指導教官の存在を感じさせます。数年前に、京大電気がらの論文を1件発見したことがありますが、中国からの留学生に成果を世界で第1級の学会に発表させた成果を持たせて帰国させてあげようとの配慮に見えました。

また、論文末に記載される参考文献の数は、英語で生活していると言われる約15億人に属する著者からの一般的な多く、外国の論文へのアクセスの容易さを示唆している、諸外国での研究成果の把握の容易さについて、日本人との差を感じます。

財団法人  
近畿地方発明センター  
理事長 近藤 文治

財団法人  
応用科学研究所

田中プリント

Telecommunications Journal of Australiaは、政策論争など独特の内容を多く含んでいます。また、人口の少ないウズベキスタンですら、英文論文誌を発行しています。光伝送、交換機などを取り扱うSPICの会議が、2004年11月9-11日の間。北京で開催され膨大な予稿集が出版されています。先のソウル会議や香港会議といい、これだけの大会議を日本の学会は招聘して運営できる能力を持っているだろうかと危惧しています。

(2)日本の学会誌  
日本の電子情報通信学会では、邦文論文誌とは別に英文論文誌も精



力的に出版しておられます。しかし、少なくとも半数は、中国、韓国、台湾、シンガポールなどからの投稿であり、アジア近隣国からの投稿のために存在している感もします。2、3年前の衛星通信特集号では、日本の人口の1/3の韓国からの論文が、日本からのとほぼ同数であり、内容も英文も日本よりも優れていたこともあり、I E E Eに比べて、ここに発表される日本人の論文はあまりにもひどいのがあり、編集担当に、せめて外人校正でも受けないと、国際的に権威が保てないと話したこともあります。この英文論文誌がなければ、日本人のもっと多数が、国際的なI E E Eなどに発表するのではないかと、考えたりもします。

N T Tの研究所のO Bは、大学教授として再就職することも多く、現在約60名に達しているとのことです。後の方で、日本の大学が多過ぎることに触れますが、日本の大学教授の中には、自分で英文の論文を書いたことがない人もおられ、引いては研究者や学生に国際的な学会の場で、英文論文を発表させようとされないのではないかと危惧しています。海外での研究状況に常に注目していなければ、自己の研究に関する客観的な判断も難しいのではないのでしょうか。中国や韓国の積極性を見るにつけて日本の現状、引いてはそ

の積み重ねが将来にもたらす結果について、研究者で無い素人の私は心配しています。(次号につづく)

### 就職先を決めるということ

加藤 徹(昭58年卒)

現在私はなぜか人事部に所属し、採用担当の仕事をする羽目になつています。洛友会の会員でこの仕事を経験したことがある人は少ないと思われるが、吉田のキャンパスを去って早20年以上、初めての経験である。私が就職した当時は、技術系の学生は学校推薦ももらって志望すれば、公務員などの厳格な試験があるところを除き、ほぼ希望どおりの企業に入社できたと記憶している。時代が変わり今は技術系学生であっても自由応募で学生を選ぶ会社が多い。当社の大学生・院生採用においても、事務・技術問わず全て自由応募制としており、かなり多くの学生の中から筆記試験・面接を経て選考する必要がある。また今はI Tやモバイルの時代であり、応募は全てインターネットH P上でエントリーしてもらい、応募者の管理も電子化され、電子メールまたは携帯電話で情報連絡をしている。それ以外の就職活動として、学校内外で開かれる就職セミナー・企業説明会も盛んであり、当社の採用

担当者もこの冬の時期に各地を飛び回って企業P Rに必死である。そこではあまり着慣れていないリクルートスーツを着た学生が、熱心にメモを取りながら志望企業ブーイスの前を取り巻いている。

会社説明会のような場では、自分を含め当社の採用担当者または学校O B社員は、学生に自分の会社の魅力を語る必要が生じるが、ほとんどの場合、自分の経験や経歴を紹介しながら説明することが多い。そうすると不思議なことに、自分でしゃべりながらほとんど忘却の彼方へ行った昔の事柄を思い出していることに気付く。当時の楽しかったこと、苦しかったこと、充実した気持ちを感じたことなど・・・ひとしきりしゃべった後は、採用のために仕事をしたというよりは、自分の足跡を振り返りながら、明日への活力を手に入れたような気持ちになつてしまふ。企業の採用活動には、人事担当者以外に多くの学校O B社員に企業説明会などで協力を願っているが、採用そのものよりも、自分に活力を与える、自分を元気にさせるという意味で、より多くの社員が採用活動・企業P Rを体験するほうが良いのではないかと強く感じている。競争社会がいつそう厳しくなつており、日常の自分の担当業務に埋没してしまい余裕

が見出せない社会人が多いと思う。そのようなとき、これから社会に巣立つ学生に自分の仕事・会社の魅力を語らせる余裕を与えること、それが結構このような時代に大事なのではないだろうか。

話は元に戻るが、今の学生はセミナーや会社説明会に積極参加し、ネットなどから膨大な就職情報を得て、検討に検討を重ねて自分の就職先を決めているような気がしている。20年以上前になるが、自分自身の就職活動時期を振り返ってみれば、就職先をいかに適当に決めたことかと思う。もちろんある程度の数の企業等を訪問し先輩社員と話したが、最終決断は「こんなところかな」という軽い気持ちで決断した覚えがある。考えてみれば、「就職」は進学、結婚と並んで人生の一大岐路であり、もし違う就職先を選べば、結婚も含めたその後の人生は大きく変わつていたことだろう。ということから、就職先選定に全精力を傾け真剣になる学生について何の疑問も持たないし当然のことと思う。その姿を見ながら、このような就職活動をはじめと経験しなかった自分としては複雑な思いであり、今の学生の真摯な姿が本来あるべき姿なのかも知れない。しかしながら自分の経験から言うと、軽い気持ちで選んだ会社とはいえ、それなり

に楽しいこと、満足した気持ち、苦しいことを経験し、結構充実した会社生活をおくれているのではないかと思つていて。従つて今の就職先を後悔したことはあまり無い。逆に真剣に考えて考え抜いて決めた会社であった場合、ちよつとした不満が増大し、それによりひどく後悔する可能性もあり、結果として「軽い気持ち」が良かったのかも知れない。「人生の重大な岐路を結構軽い気持ちで決める」、普通に聞けば誉められる行為ではないかもしれないが、過去にあまりこだわらず将来に向けてより前向きに生きるためには、自分としてはあながち間違いで無いような気がしている。人生には判断・決断する機会が多く発生するが、決断時に深く考えすぎるよりも決めた後全力を尽くすこと、それも大事なのではと、多くの学生が就職先を決める姿を企業側の立場から見つて思つた次第である。

### ヨセミテの正月

岩田 大司(平10年卒)

「来年のことを言うと鬼が笑う」という諺があるが、昨年のことを言うと何がおこるのであるだろうか。2006年の新年号にあたり、1年前の正月の話を書くのも恐縮なのだが、私にとっては印象深い正

月であった。その頃は、8ヶ月のアメリカの留学生活も終盤にさしかかり、何か記念になることをしたいと思っていた。そこで一念発起、正月休みに家族を連れて遠出の旅を計画した。行き先は、アメリカ西海岸カリフォルニア州にあるヨセミテ国立公園である。一般的に、ヨセミテ国立公園は夏が観光シーズンであるのだが、その季節は予約が一杯で宿泊料金も高い。だが、冬は夏ほど予約をとるのは難しくない。ホテル(いわゆるロッジ)だけは確保して、いざ旅立った。

通常日本からのツアー旅行であれば、移動手段もセッティングされている。ただ、それでは、あまり普段の旅と変わらないので、移動はレンタカーで行くことにした。サンフランシスコ空港からハイウェイを経由して5時間、途中で2回休憩をいれたが、中々のペースでヨセミテの入り口まで到着した。そこで、どうして冬のヨセミテは人気が無いのか判明する。ものすごい雪である。日本の雪も結構ハードだと思うが、広島育ちの私には人生で最も激しい吹雪に遭遇したと言える。4WDの車を借りればよかったと後悔しながら、チェーンを装着。昔、出雲で訓練した成果が発揮された。

このような状況で人はいるのか

と少し疑いながら、ホテルにチェックインしたが、そこは割と繁盛しているらしい。ただ、皆の出で立ちがスキー客のように見えるのは、気にしないことにした。夕食はロッジのレストランで食べたが、山小屋にはおいしかった。ただ量が多いので、一人前を分け合って食べた。ここまでが大晦日であり、明日の初日の出が見られるかどうか、天気予報を気にしながら寝に入る。当然、紅白歌合戦はやっていない。まあ、時差の関係で、日本はもう「あけましておめでとう」なのだが。

翌朝、目覚めて外にでると、雪はやんでいる。天気も良いようだ。ようやく、観光ができるかと勇んで出かけることにする。そこで再び、なぜ冬にヨセミテに来てはいけないのか判明する。霧である。言い忘れたが、ヨセミテは壮大な巨岩や豊かな動植物が有名なのである。冬だから、木が枯れているのは仕方がないが、よく考えてみるとその巨大な岩は、全て白い霧のカーテンに隠されて見えてこない。当然、初日の出など、夢のまた夢である。なんだか、何をしきたのか分からなくなってしまう。が、とにかくヨセミテ観光、最大の目玉ハーフドームの見える地点まで移動する。ちなみにハーフドームはヨセミテ渓谷の顔とも言える巨大な岩山であり、ドームが半

分削られた形なのでこの名がある。

やはり何も見えない。数人いるアメリカ人観光客も、あっちがハーフドームのはずなのだがと、くやしそうに霧を眺めている。果たして、霧は晴れるのか。三脚付のカメラを持っている人は、テントまで立てて長期戦の構えだ。30分程して、子供が白目になり寝かけた頃、霧が晴れだした。しかし、次の霧(もしかすると雲なのか)がまたかかりそうである。みんな我先にと、写真を取り出した。このチャンスを見逃すと次にいつ顔を出すか分からない。ちなみに、ハーフドームはその形状からヒヨコにもなぞらえられるのだが、見えているのは、デコと嘴のみである。そんな出し惜しみのヒヨコも、結構待ったせいか有難いものに思えてしまう。慌てて撮ったので出来は良くないが、なんとか証拠写真は撮れたと一安心して昼食をとった。

昼食をとって、レストランを出て驚いた。霧がすっかり晴れているではないか。そこで、ヨセミテの全容を初めて知る。周りは切り立った巨岩の壁、ところどころ流れ落ちる滝、雪化粧した森を縫う溪流、なんとも感動的な大自然のパノラマが広がっているのである。半ば諦めていただけに、巡り合った光景に思わず涙ぐむ、とは誇張がすぎるか。だが、ああ、あれがエルキャピタン(ヨセミテ渓

谷に入ると最初に目につく、1095mの垂直な一枚岩)なんだねと確認できることに喜びを感じてしまったのは事実だ。ガイドブックもようやく開かれ、気持ちも盛り上がった。

巨岩の景色も満喫したので、次はセコイアの森に行ってみたくなくなる。ここには、人が40人がかりでぐるりと囲める、屋久杉ばりの巨木グリズリー・ジャイアントや木の根元に大きな穴のあいているトネルツリーなどを見ることができ。レンタカーがあるので、移動も簡単だと一人考えていたが、甘かった。雪のため、道路が封鎖されているのである。見ると、知らずに行つて引き返すアメリカ人も多い。みんな同じ気持ちなのだろう、語らずとも連帯感が生まれている。そのせいか、お土産屋ではセコイアの木のオブジェが良く売っていた。正月なので、門松の

ようなセコイアがあったら買っていた気がする。そのようなわけで時間も過ぎ、サンフランシスコに帰る。後になつて知るが、冬のヨセミテでも天気がいい時もあるらしい。また、雪の山河を見るのも醍醐味の一つであるのは、間違いないので、これも一つの良い体験であった。最後に、帰りにお土産で購入したスクリーンセーバーで見るヨセミテは大変美しかった。いつか、また行つてみたいと思う。できれば夏に・・・

雪のハーフドーム



雪のハーフドーム

**本部だより**

洛友会改革に関する近況

洛友会幹事長 木村 磐根(昭30年卒)

洛友会の改革WGでこれまで検討されてきたことは、その後本部の長尾眞会長、荒木光彦副会長と本部幹事、および電気系教室の先生方の間で詰め、かなり具体的に進んでおりますので、その要点をまとめてご報告いたします。

1. 会費の納入の方法を、郵便局とコンビニのどちらでも可能にする変更は順調に進んでおり、来年4月の会報発送時には新しい振込用紙を同封してお送りいたしますので、どうかよろしくお願い致します。なお会員の方々から、たとえば5カ年分をまとめて払い込む

ようなセコイアがあったら買っていた気がする。そのようなわけで時間も過ぎ、サンフランシスコに帰る。後になつて知るが、冬のヨセミテでも天気がいい時もあるらしい。また、雪の山河を見るのも醍醐味の一つであるのは、間違いないので、これも一つの良い体験であった。最後に、帰りにお土産で購入したスクリーンセーバーで見るヨセミテは大変美しかった。いつか、また行つてみたいと思う。できれば夏に・・・



方法はないかというお問い合わせがあり、これらのご希望にどう対応するかを検討して2月の役員会で決めたいと思っております。

2. 洛友会事務局はこれまで応用科学研究所に置かれておりましたが、来年4月からは、京都大学桂キャンパスA1棟電気工学専攻の建物の中に置かれることが決まりました。(正確な連絡先等は会報の4月号でご報告いたします。)

こうして洛友会活動を我々の卒業した教室とできるだけ一体的に運用して行き、また会報やCueを通じて教室と先生方の活動を卒業生の皆様がたにお知らせすることもしてゆく予定であります。なお名簿の管理、会費の徴収事務等はこれまでの洛友会電気百周年記念事業事務局で行うことになっております。ただし会費納振替え用紙上の振込先はあくまで「洛友会」です。

3. 名簿は来年秋発行の方向で進めておりますが、その場合には4月に皆様に、事務局が把握している現状の各会員の情報を印刷したものを送りし、間違いがあればご訂正を頂くとともに、名簿に掲載を望まれない項目に×をつけてご返送いただく方法を考えております。個人情報保護法との関連で名簿の発行が難しいという考え方もありますが、同窓会名簿は、会員間の情報交換の目的以

外には使用しないことを記載すれば発行することができるとの弁護士会の解釈もあり、皆様のご協力により発行いたしたく、ご協力をお願い致します。なお今回から名簿発行のために広告費を集めることは中止することになっております。その結果各支部の活動費が減少して支部活動に支障をきたすこととなりますので、現在の本部会費(3000円)から支部に援助する等の方法を検討しております。これも来年2月の役員会でご議論頂く予定です。

**支部だより**

**中部支部**

**「秋の例会」**

中部支部では毎年恒例の「家族同伴秋の例会」を開催しています。今年も11月19日でした。この例会は文化・研究施設の見学と秋を満喫する行楽を兼ねたもので、参加者はここ数年では少ない方で18名でした。最近では夫妻で参加される会員も多く、今年は半数に及びました。

今年の行き先ですが、愛知県での二大プロジェクト(愛知万博と中部国際空港)の一つ、中部国際空港方面です。

さて、まずは空港見学からというところで、アクセスプラザに集合し、女性係員に構内の案内をお願い

いたしました。ビル内は機能的に設計されていて、バリアフリー対策も充実しているように見受けられました。また、ここには飛行機のフライトが見える展望風呂もあります。見学コースには万博アメリカ館で展示されていた、ライト兄弟の乗った同寸の模型飛行機が展示してありました。コースの最後になったスカイデッキでは、強風にあおられての展望でありました。一通り見終わると心は既に昼食であり、ビル内にあるイタリア料理店へ。料理とお酒?で話はずみ、満腹したところで次は対岸の常滑市中心部へ。

常滑市は古くからの窯業地で工芸品から壺、土管など多くの作品、製品を世に出しました。常滑焼の代表的な製品は朱泥の急須です。

市の中心部に「やきもの散歩道」があり、細い道を上ったり下がったり、右へ左へと曲がり、一周は15kmで出発点に戻ってきます。途中にはレンガで出来た煙突が何本か見え、また、土管坂、陶芸工房など色々ありました。

これで今年の例会も無事終了しました。帰路に着いて、名鉄常滑駅が見えてきて、一安心。帰りの電車では気持ち良さそうにウトウトしている人も。

最後に、幹事の一人としてこの例会にもっと多くの会員に参加して

もらえたら良いなと思っています。

林 靖人(昭42年卒) 記

**東京支部**

**2005年秋の講演会**

本年度、新たな試みとして、特に30~50代以下の若い世代の会員の皆様に広く参加して頂けることを狙いとしたり、秋の講演会を企画しました。講師には、京都大学元総長であり現在は独立行政法人情報通信研究機構(NICT)の理事長である長尾真先生をお招きしました。昭和22年卒業から平成15年卒業まで、幅広い年次から127名の参加を頂き、講堂はほぼ満杯状態となる盛況ぶりでした。

講演会は平成17年11月7日(月)18時30分より、学士会館の講堂において開催されました。冒頭、古濱支部長よりご挨拶を述べ、東京支部の置かれている状況(二特に若年層における)納入率の低下など)や会員の会費で洛友会がささげられていることへの訴求が行われました。

続いて、長尾先生より「ユビキタスネット社会における研究開発の展望」コミュニケーション技術の方向性」と題した講演を頂きました。現在、NICTで行われている研究活動を中心に、言語や文化、身体能力などの壁をできるだけ低くし、世界中どこに居ても、

自分の課題を解決し、人々と相互理解をし、心豊かに生活できる環境の実現に関するビジョンが紹介され、居ながらにして何でも楽しめる環境、居ながらにして何でもできる環境、各種の高度なセンシング技術によってあらゆる状況における不測の事態に対応できる環境、言語・文化を越えて五感通信をも可能とする環境、などを実現する充実した情報空間の建設に向けて努力することの大切さが訴えられました。

講演終了後、質疑応答に移り、日本としての国際標準化への取り組みの考え方や、脳の研究に関する動向、国家としての通信網整備のあり方、ユビキタス社会を実現するためのネットワークセキュリティと法制度の整備、地球環境問題に関する取り組み、などに関する質問やコメントが会場から寄せられました。活発な討論は尽きることなく、1時間の予定時間を大幅に超過して、19時50分頃に閉会となりました。

今回、会合参加費は無料としましたが、会費納入率向上施策の一環として、洛友会本部のご協力を頂き、未納会費分に関して振り込み用紙をお配りすると共に、会場において未納会費の現金納入を行いました。その結果、その場で5名の方から未納会費の納入を頂く



ことが出来ました。

全体の懇親会は行いませんでしたが、各クラス単位で小規模の懇親会が多数企画されており、講演会終了後は、久しぶりに顔を合わせる同期と旧交を温めるため、参加者の皆様は三々五々夜の町に繰り出していきました。

大矢 智之(昭62年卒) 記

### 関西支部

#### 活動報告

関西支部では去る10月22日(土)に、恒例のゴルフ競技会を武庫の台ゴルフコースにて開催いたしました。当日は時折小雨の降るあいにくの天気となったものの、松室氏(昭33年卒)の始球式でプレイを開始し、合計13名(内、シニア3名)が競技に汗を流され、シニアの部では井上氏(昭34年卒)、

一般の部では佐伯氏(昭56年卒)が日ごろの鍛錬の成果を発揮され、それぞれ優勝されました。

また、翌23日(日)には、こちらも恒例の家族見学会を「保津川下りと京大桂新キャンパス見学」という行程にて、総勢86名の参加をいただき開催いたしました。前日同様あいにくのお天気の中、一同は亀岡から二十数人乗りの小船四艘に乗込み、岩場や急流での船頭さんの練達した權さばきに酔いしれ、行き違うトロッコ電車の乗客へ手を振り交流を楽しみながら、紅葉間近の美しい山々に囲まれた深谷を嵐山まで約1時間半かけて下って行きました。

昼食では、森本支部長のご挨拶の後、川風で冷えた体を季節のおいしい食事とお酒で温め、食事後には観光客で賑わう渡月橋周辺のみやげ店での買い物なども楽しむことができました。

午後訪れた桂キャンパスでは、「ようこそ！洛友会関西支部ご一同様」と表示された電光掲示板と雨上がりの虹に迎えられ、新しい時計台(時計は吉田の時計台にあったものだそうです)や電気系教室、そして教室のご好意で当日公開していただいたシステムシミュレーションラボや無響室などの最新の研究施設、京都市内を一望できる桂ラウンジなどを見学することが

できました。広々としたキャンパスは、近隣にお住まいの方々が愛犬と散歩を楽しんでおられる姿も見られるなど、我々が学んだあの吉田キャンパスからは想像できないような素晴らしい空間であり、みなさんその魅力を十分堪能された様子でした。なお、キャンパス内には、素敵なレストランやカフェもあり、一般にも公開されておりますので、皆さんもぜひ一度足を運ばれてはどうでしょうか。

各所見学の後は、キャンパス内の桂ホールで長尾先生のご講演の時間です。荒木副学長からのご挨拶の後、長尾先生より「情報と日常生活」と題し、ユビキタスネットワークなどについてお話しいただきました。近未来の夢のある内容であり、みなさん大変熱心に聞き入っておられました。締めくく



りに、長尾先生から新洛友会長として、これからの洛友会活動のあり方についてのお話があり、参加者一同、洛友会の今後の維持・発展への思いを共有することもでき、楽しく有意義だった一日を振り返りながら、散会となりました。

福島 敏(平3年卒) 記

### ゴルフ競技会報告

第84回関西支部ゴルフ競技会が平成17年10月22日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。当日は、時折小雨の降るあいにくの天気となったものの、松室氏(S33年卒)の始球式でプレイを開始し、合計13名(うちシニアの部3名)が競技に汗を流しました。結果は次の通りです。

- (シニアの部)
  - 優勝 井上 幸美 (S34年卒)
  - 2位 伊藤 俊一 (S34年卒)
  - 3位 松室 憲尚 (S33年卒)
- (一般の部)
  - 優勝 佐伯 昭 (S56年卒)
  - 2位 西村登努志 (S38年卒)
  - 3位 大澤 靖治 (S44年卒)

△第85回競技会のご案内▽  
平成18年5月20日(土)

於 武庫ノ台ゴルフコース  
第75回以降、過去5年間の優勝者を対象に、優勝カップ取り切り戦を実施いたします。多数のご参加をお待ちしております。

△連絡先▽  
関西電力

大田 龍夫 (S53年卒)  
山田 浩章 (H11年卒)

050・7104・6062

### 編集後記

新年を迎え会員皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。年末には異常寒波の襲来で各地で久方ぶりの大雪となりました。

昨年は洛友会の改革が検討され、『本部だより』(参照)のとおり1953(昭28)年、鳥養初代会長以来53年間にわたり続いた(財)応用化学研究所内の事務局は、4月より京大桂キャンパス内に移管されます。TEL・FAX・メールアドレス等の詳細は次号にてお知らせ致します。

事務局 松本 博記

### 訃報

講昭12	白井 丁	16・11・30
講昭14	寺沢 武雄	17・11・9
昭15	日野 晴夫	17・8・24
昭26	安岡 幸義	17・9
昭26	清水 一宏	17・10
昭44	藤田 正晴	17・10・30
昭46	藤本 靖一	17・5・29

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。